

【調査報告】

佐賀県有田町の観光施設の多言語対応について

—有田焼関連施設の韓国語解説にみる課題—

長谷川 由起子

要約

「有田焼」で有名な佐賀県有田町は、朝鮮半島との縁の深い町であり、韓国人観光客が多く訪れる町でもある。有田町でもこの点はよく認識されており、関連する観光資源・施設に韓国語を含む多言語によるきめ細かい対応がとられている。しかし、多言語解説媒体を網羅的に収集し内容を詳細に検討すると、翻訳文作成において一般にしばしば指摘される誤訳や訳語不統一の問題のほかに、使用言語の偏在や、有田焼の歴史・文化的背景などの理解にかかわる課題がある現状も見いだされた。本稿は、韓国人観光客がこの町を訪れるに際して重要な役割を担うべき観光資源・施設関連の韓国語解説文を中心とした多言語対応媒体を検討し、その課題と解決策について考察するものである。

Keyword : 有田焼, 観光資源, 多言語対応, 韓国語解説文

1. はじめに

北部九州は古来より朝鮮半島と歴史的、文化的関係が深く、朝鮮半島関連の史跡等が多数存在するが、中でも佐賀県の「やきものの里」有田町は、朝鮮半島との関係抜きにはその観光資源を語るできない地域である。

有田町の誇る「有田焼（磁器）」の歴史は、文禄・慶長の役で朝鮮に出兵した佐賀藩主鍋島直茂らが朝鮮人陶工の李参平を連れ帰ったことに始まるとされる（有田町史編纂委員会，1985，p.1）。その秀でた窯業技術は地元にも多大な恩恵をもたらした。日本窯業の飛躍的発展にも寄与した。このため、李参平は有田の人々の尊敬と感謝の対象となっており、現在の有田町南東部に位置する窯業地帯を一望することのできる小高い山の上には「陶祖李参平の碑」¹が建てられている。

有田町商工観光課によれば、有田町には中国人と並んで多くの韓国人客が訪れるが、その大多数は観光バスに乗った団体旅行客であり、主な目的地は「陶祖李参平の碑」なのだという²。韓国の高校の歴史教科書には、壬辰倭乱（文禄の役に対する韓国側の名称）で日本に連行され

¹ 有田焼創業300年を記念し、1917年に有田の窯業界が建設した、李参平を讃える顕彰碑。

² 有田町にはホテルなどの宿泊施設がほとんどなく、観光バスの乗客内訳は不明であるため、国籍別来訪者数の正確なデータはなく、有田町による概数把握によるものである。なお、韓国で2019年夏、日本の貿易管理強化に対する反発による「No Japan運動」が起こり、COVID-19感染拡大防止のため入国制限が始まる2020年2月までの約半年間、訪日韓国人が前年同月比で約60%減少しており（日本政府観光局データより概算）、有田町を訪れる韓国人も激減したという（有田観光協会での聞き取りより）。

た陶工の代表として李参平の名が挙げられており³、「陶祖李参平の碑」は日本観光の目玉の一つとなっているのである。

一方、有田は電車でのアクセスがよいため個人客も多いが、JR有田駅前および内山地区の中心に位置する有田町観光案内所を訪れる外国人の中でも、韓国人観光客が多数を占めるという⁴。彼らの大部分も「陶祖李参平の碑」が主な目的地だろうが、個人客の場合、有田の町を周遊するなかで、有田について、あるいは日本の歴史や文化について様々なことを発見し、学び、感じることだろう。団体客には一般に韓国語ガイドがアテンドするため韓国語による説明がなされるが、中には現地に設置された解説板に見入る団体客も見られる。このように、日本現地で発せられる情報から何かを得ようとする韓国人客への対応において、韓国語で観光資源・施設の歴史や文化的意義を解説した案内板、パンフレット、ウェブサイト情報などは、有田を知り、有田を通して日本を理解してもらうための重要なインフラであると言えよう⁵。

そこで本研究は、有田町の観光資源・施設に関する様々な解説媒体の文字資料を収集して、まず多言語対応状況を把握し、次に収集した資料のうち日本語と韓国語の対訳・翻訳に焦点を当て、有田町を訪れた韓国人に、有田町の観光資源・施設の背景や意義が適切に伝わっているかという点を念頭に考察する。

2. 先行研究

観光地における多言語表示については「言語景観」という概念で捉えられることが多いが、「言語景観」とは言葉通り看板や案内板の文字を景観の一部として捉えるものである。「言語景観は自然に、受動的に視野に入るものであり、意図的に読まなければならないものではない(ロング, 2011, p.4)」とされるように、表示内容や翻訳の質の問題等にはあまり関心が払われない。近年、「言語景観」が国際観光の受け入れ環境と大きく関わることから、大分県別府(松田, 2009)、山形県村山地方(加藤他, 2009)、北海道ニセコ(加藤, 2009)、沖縄県(李, 2018)、京都市(濱口, 2021)など、各地の観光地の多言語表示の現状把握や課題の整理が盛んに行われてきたが、いずれも文字情報の内容よりは文字種・言語種の配置や分布状況といった外形に焦点が当てられてきた。

表記法を含む日本語と外国語との対訳や翻訳文の内容に踏み込んだものとしては、本田他

³ 韓国政府国史編纂委員会データベース「우리역사넷(我が歴史ネット)」>「歴代国史教科書」>第7次教育課程「高等学校国史」および「재미있는 초등역사(楽しい初等歴史)」。

⁴ 有田観光協会での聞き取りによる。

⁵ 有田観光協会では観光施設を案内するガイドを紹介しているが、外国語による案内には対応していない。ただし、案内所窓口で職員が簡単な英語や韓国語を使って対応することはあるという(有田観光協会での聞き取りより)。

(2017), 植田 (2017), 李 (2018), 扈 (2020), 長谷川 (2021) が挙げられる。本田他 (2017) は、観光客を目的地に導いたり注意喚起を行ったりする多言語設置物「公共サイン」に記された日本語と対応する英語表現の機能や形式の適切さについて論じた。植田 (2017) は、観光庁 (2014) における地名、観光施設、公共施設名の多言語表記ガイドラインの不明瞭さと、同書に掲載された対訳語一覧の中の不適切な韓国語の訳語・表現について分類し、その原因として言語規範に対する認識不足、原義確認など翻訳手順の未熟、場面や文脈に対する考慮の欠如、単純誤訳、入力ミスなどがあるとした。李 (2018) は沖縄の観光施設に関する文字情報を収集し、日本の地名や施設名の韓国語表記が統一性を欠く点に注目、沖縄県における統一的な翻訳ルールを提案した。扈 (2020) は奈良文化財研究所の文化財の多言語表示化事業を進める中で、日本語地名・遺跡名のハングル表記の不統一とその原因を考察し、奈良文化財研究所としての表記ルール案を提示している。植田 (2017), 李 (2018), 扈 (2020) とも日本の固有名詞等のハングル表記の問題に焦点を当てており、この問題の解決が容易ではないことを示唆している。

長谷川 (2021) は対馬の観光施設の案内解説板を調査し、使用されている言語種と翻訳の様相をめぐり、文化的背景の違いを考慮する必要性と、言語的近似性ゆえの翻訳作業の甘さを指摘し、翻訳の質の確保の重要性を主張した。

政府の施策面では、2014年に観光庁から『観光立国実現に向けた多言語対応の改善・強化のためのガイドライン』が出されて以来、2015年には環境省から『多言語表記対訳語集』、2016年には文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議から訪日外国人旅行者に文化財の魅力を伝える視点が示され、2019年には文化庁『文化財の多言語化ハンドブック』、2020年には観光庁『魅力的な多言語解説作成指針』が提示されるなど、観光関連の多言語対応に関する指針・手引が関係各省庁等から次々と示されている。観光庁 (2014) には上述のような課題もあるが、全国各地の先進事例が参照され、省庁間の協力も進むなか、ある程度安定した枠組みができてきたと言えよう。

現在、観光庁および文化庁は、外国人目線に立った多言語解説、表記などの統一性・連続性、文化財の魅力を伝える解説文の実現のための大規模な支援事業を行っており⁶、有田町も2020年から支援の対象となっているが、有田町では英語解説文の改善を目下の目標としているという (有田町商工観光課での聞き取りより)。文化財解説文の多言語対応化において、いたずらに言語数を増やすのがよいわけではないが、距離の近さゆえに韓国からの来訪者が圧倒的に多く、特に朝鮮半島との歴史的、文化的関連の深さから関連史跡が多い有田町の観光にあって、韓国語による対応の改善をいつまでも後回しにすることはできないのではないだろうか。

⁶ 観光庁が「地域観光資源の多言語解説整備支援事業」を、文化庁が「文化財多言語解説整備事業」をいずれも2018年より実施している。



図1 佐賀県有田町の位置



図2 有田町全域（白っぽい部分）

3. 有田焼の歴史と概要

本論に入る前に、『有田町史 陶業編 I』（pp.4-46），『有田町史 通史編』（pp.31-57），『有田町史 陶芸編』（pp.227-335）を参考に、「有田焼」の歴史と概要を本稿との関連部分を中心に、確認しておく。

安土桃山時代後期、畿内で茶道が流行し、茶器としての陶磁器がもてはやされていたが、当時、国産は陶器に限られ、磁器は主に中国から輸入されていた。折しも1592年に始まった文禄・慶長の役で朝鮮に出兵した佐賀鍋島軍は、他の西国大名同様、日本撤収の際、様々な戦利品や捕虜とともに陶工らを連れ帰り、陶器の製作を命じた。

そのうちの一人である李参平は、いったん有田から20km北東に位置する多久（図1参照）に定着するが、磁器の原料となる陶石を求めて佐賀藩領内を探し回った末、1616年頃、有田の泉山（図2参照）で良質の陶石（磁石）を発見し、集団でここへ移住、磁器製造に成功した⁷。同じ頃、やはり朝鮮から連れて来られ、武雄に定着していた陶工の妻で、夫の死後、多くの職人を統率し、後に敬意をこめて百婆仙と呼ばれた朝鮮人女性陶工も、陶石を求めて集団で有田に移住し、磁器生産に貢献したとされる。

時あたかも大航海時代だったヨーロッパでは、中国の景德鎮で製造された鮮やかな色絵磁器が珍重されていた。一方、初期の有田磁器は、青磁や染付の素朴な作風だったが、国内では独占的に製作され、近隣の伊万里港から船積みされたことから、「伊万里」と呼ばれた。1646年に

⁷ 近年の研究では、李参平が多くの陶工を組織し、磁器製作を産業として確立させたことは大きな功績だが、陶石発見の経緯、時期については不明な点が多いとされる（有田町歴史民俗資料館＞歴史民俗資料館ブログ「泉山日録」2020年1月～8月）。

は酒井田柿右衛門が高度な絵付け技術「赤絵」を完成させ、景德鎮を模した色絵磁器も発展していった。ちょうどその頃、中国の王朝が明（1368～1644）から清（1644～1912）に移行する混乱の中で景德鎮磁器の取引が困難となり、ヨーロッパの貿易商が有田磁器に着目、注文買い付けを繰り返す中で、有田磁器がその要求に応じて品質を向上させ、世界の「伊万里」として名を馳せることとなる。

一方、現在のJR有田駅のある所からほど近い場所に御用窯を構えていた鍋島藩は、品質向上と技術漏洩防止のため、1680年頃、御用窯を山深い大川内山（図3参照）に移し、国内向けの超高級磁器「鍋島」が作られるようになる。

江戸末期になると、鍋島家は西洋の技術をいち早く導入し、行政改革や産業振興、軍備や科学技術の開発で近代化を進める中、1867年にはパリで開催された万国博覧会に「伊万里」を出品し好評を博した。以来、欧米で開催される万国博覧会に出品された磁器作品が何度も金牌を受賞するなど、「伊万里」は高い評価を得ていった。

現在も有田焼、伊万里焼と言えば高級なイメージがあり、実際、贈答品やホテル・料亭などの高級食器としての取引が主流であるが、社会構造の変化や景気の浮き沈み、海外の安価な大量生産品の流入に影響され、全体には縮小傾向にはあるという。しかし近年は一般生活用品や趣味の領域を拡大し、斬新なデザインの開発にも力を入れており、陶器市による集客や内外からの観光客も地域経済の支えとなっている（山田，2018）。

以上のように、有田焼の原点が李参平にあることは確かであるが、中国やヨーロッパが絡むその後の発展の様相は極めてユニークであり、幕末から明治にかけてのダイナミックな展開も含めた総体が有田焼または有田の姿であると言えよう。「有田焼＝李参平」のような図式では決して語れないことは事実である。

焼物関連の見どころは、図3に示すJR上有田駅から有田駅にかけての内山地区を中心に、徒歩もしくはバスやタクシーによる短距離の移動で回ることができる範囲に集中している。鍋島藩窯のあった大川内山も見どころだが、内山地区からだて車で黒髪山の山裾を大きく迂回するか、伊万里の市街地から回り込む位置にあり、大川内山が伊万里市域であることもあって、有田町観光からは独立した形となっている。

本稿では有田町内山地区を中心とした徒歩圏内の焼物関連の観光施設が韓国語解説媒体を通じて韓国人の目にどう映るか、有田焼という文化が、そして日本文化がどう伝わっているかという視点を念頭に置きながら、収集した資料を検討していく。

4. 有田町の観光関連施設の多言語対応資料

ガイドを伴わずに有田町を訪れた外国人が利用しうる観光施設関連の多言語解説媒体には、



図3 案内解説板が設置された有田町の主要観光施設

観光施設付近に設置された案内解説板と、駅、観光案内所、資料館等に具備されたパンフレット、マップ等の印刷物が挙げられる。Wi-Fiなどでインターネットが利用できれば公共施設・団体の公式ウェブサイトも利用可能だろう。そこで以下に、有田町観光施設付近に設置された案内解説板と、町内各所に備置された印刷媒体、有田観光関係の公式サイトの言語使用状況を概観する。

4.1. 案内解説板

案内解説板に用いられた言語資料の収集は、2021年4月から8月にかけて現地を訪れ、有田観光協会が制作・配布している『有田町観光ガイドブック有田』と『有田散策MAP』を参考に対象を選定し、観光客向けの案内解説板等の文字情報を写真に撮影した⁸。対象箇所の位置と名称を図3に①～⑳で示した。複数の施設が隣接し、かつ一連の設置物と判断される場合は1つの番号で示した。

表1は、図3に示した案内解説板に使用された言語と設置概要である。案内板の設置主体が、業界団体や顕彰会など、町以外の団体であるものには(団)、設置場所の所有者によるものには(私)と付記した。特に断りがない場合は町による設置物である。案内板の設置年が本体に明記してある場合はこれもカッコ内に付記した。

使用言語名について、日本語はJ、英語はE、韓国語はK、中国語(簡体字)はCsと略記し、

⁸ この一帯には、窯元、ギャラリー等、観光施設として機能する私的施設も多数あるが、これらは施設概要等を解説した屋外設置の案内板を有しないため対象としない。また、神社の由緒書、碑文、ポスター、トイレや出入り口等に貼られた注意書き、交通標識等も対象としない。

表1 観光施設等に設置された案内解説板の使用言語等

	設置対象	使用言語・設置主体・設置年
①	唐臼, 赤絵窯	施設概要: <1>JE(団, 1991), <2>JE(1997)
②	先人陶工の碑	施設概要: <1>J(1981), <2>JE
③	泉山磁石場	施設概要: <1>JE(1998), <2>KCs, <3>JEK(団, 2007), <4>J(2019)
④	石場神社, 高麗神	施設概要: <1>JE(1998), <2>KCs
⑤	大公孫樹, 泉山口屋番所	施設概要: <1>J, <2>JE, <3>KCs
⑥	陶祖李参平の碑	建立趣意・解説: <1>JKE(団, 2005), <2>JEK, <3>韓国の李参平記念碑建設解説: J(団, 1991)
⑦	陶山神社	施設概要: <1>JE(1999), <2>KCs, <3>奉納品・碑文等の説明: J(団)
⑧	李参平の墓	墓碑解説: JK(2004)
⑨	天狗谷窯跡	<1>詳細: J, <2>概要説明: EKCs
⑩	復元唐臼	<1>施設概要: JE(1991), <2>標識・操作方法: J
⑪	李参平邸	顕彰文: J(私)
⑫	皿山代官所跡	施設概要: JE(1998)
⑬	儒学者谷口藍田の碑	顕彰文: JE(団, 2000)
⑭	有田陶磁美術館	施設概要: JE
⑮	トンバイ堀のある裏通り	施設概要: JE
⑯	旧田代家西洋館	施設概要: J(2019)
⑰	百婆仙の法塔	墓碑解説: JK
⑱	内山伝統的建造物群保存地区	施設概要: JE
⑲	百婆仙の像	施設概要: JK(私)
⑳	九州陶磁文化館屋外展示物	施設概要: JE

1つの案内板に併記された言語の略号を、表示された順にひとまとめにして記した。例えば、「JEK」は1枚のパネルに日本語、英語、韓国語の順で解説文があることを意味する。同じ箇所案内板が複数ある場合は< >付の数を付して併記した。「JE」のように枠で囲んだものは、図4にあるような、陶板に写真や解説文を染付けた、有田ならではの案内板である。

使用言語の組み合わせは、(1)日本語のみ、(2)日本語と英語の2言語、(3)日本語と韓国語の2言語、(4)韓国語と中国語(簡体字)の2言語、(5)日本語・英語・韓国語の3言語(配置順は2通り)の5パターンだった。



図4 泉山磁石場前の案内解説板

有田町商工観光課によれば、有田町の国際交流はもともと商工会議所が担っていたという。1979年ドイツのマイセン市と姉妹都市提携し⁹、1990年に日韓の窯業親善団体の共同で韓国公州に李参平公記念碑が建設されたことから両国の定期的な小学生交流が始まり、国際化が意識されるようになった。そして、1996年に有田町で開催された「世界・焔の博覧会」で国際観光対応が本格化したという。

表1の①<1>、⑥<3>、⑩<1>は1990年からの韓国との交流を契機に設置され、①、②、③、④、⑤、⑦、⑫、⑭、⑮、⑱、⑳といった主要観光施設には「焔の博覧会」後、日本語・英語併記の磁器製の案内解説板が順次設置されて

いった。2000年代に入ると韓国や中国からの来客が増えたため、2004年頃から③、④、⑤、⑦に日英2言語案内板に加えて韓国語と中国語の案内板を並置する形で、⑨は日本語のみの案内板に英語・韓国語・中国語の案内板を加える形で4言語へと拡充していった。⑥、⑧、⑰、⑲は特に有田焼の起源ともいえる朝鮮半島出身者を偲ぶ史跡であることから、使用言語として韓国語が英語より上の優先順位で採用された形となっている。

業界関係団体や案内板設置場所の所有者が設置した解説板は、設置主体がそれぞれの思いを込めて必要と判断した言語で製作したものであり、不統一感を免れないとしても止むを得まい。しかし、⑨～⑮と⑱、⑳が日本語のみまたは日本語と英語のみであるという点はどうだろう。朝鮮人陶工関連史跡の他にも有田焼や有田町の様々な面に触れたいと考える韓国人客には、残念な印象を与えてしまうのではないだろうか。設置者にすれば、韓国人が多く訪れ、韓国語のニーズのあるところから優先的に整備するという配慮を示したのであろうが、結果的に、韓国人は有田の一部の側面にしか関心がないだろうと決めつけることになってしまう懸念があると思われる。

⁹ マイセン磁器は有田磁器や中国磁器の影響を受け、18世紀に誕生している(『有田町史 陶芸編』p.278)。



図5 『有田散策マップ』の韓国語版(表)

4.2. 印刷物

次に冊子、リーフレット、マップといった印刷媒体について概観する。

駅、観光案内所、資料館等には様々な冊子、チラシ、マップ等の印刷物が具備されているが、ここでは有田観光協会が発行した多言語媒体である①『有田町観光ガイドブック有田』(以下、『有田』)と、②『有田散策マップ』(以下、『マップ』)、そして③有田の美術館・資料館の類の中で唯一、多言語印刷媒体を発行している佐賀県立九州陶磁文化館のリーフレット(以下、『文化館』)の3種を検討する¹⁰。

なお、以下でも言語名を4.1.と同様に略記するが、これらに加え、中国語(繁体字)をCt、タイ語をTとし、ドイツ語をDと略して付す。

印刷物の形状は、①『有田』が表紙・裏表紙を含めて8頁のA4版冊子、②『マップ』は表に有田町全体の地図と見どころを、裏に主に内山地区を拡大した地図と見どころを記したA3判の1枚もの(図5)、③『文化館』は表に利用案内と代表作品の紹介、裏に館内施設および展示室を説明し、三つ折りにしたリーフレットである。

まず、①『有田』はJ・E・K・Cs・Ct・Tの6種の版があり、全8ページのうち見開き2ペー

¹⁰ これら3種とも有田観光協会のホームページからpdfでダウンロードできる。このほか有田町と嬉野市の共同制作によるA4版12頁の冊子『うれしのありたトリップ』が同様にダウンロードできる。これは週末を利用した若い女性の小旅行を想定し、磁器製品を含むかわいい雑貨・小物とスイーツを中心とした食べ歩き・買い物に特化した冊子で、日本語版と韓国語版の2言語のみとなっている。韓国が国内感覚で捉えられているという点が興味深く、韓国語翻訳のレベルも高いが、2014年から3年間の限定キャンペーンで、現在はキャンペーン期間が過ぎ、冊子がほとんど利用されていないため、本稿の検討対象からは除く。

ジ分がJ・Kの2言語のみ他の言語と内容が異なっている。全言語共通の6ページには、有田焼の歴史と特徴、美術館・展示館、観光施設の紹介を兼ねたテーマ別散策コースモデル、食と土産物紹介等、有田の基本情報が詳しくまとめられている。J・Kの2言語のみが異なる2ページに、他の言語では四季折々の行事等が紹介されているところに、日本語版は4人の女性の対談記事が、韓国語版では有田焼の歴史と李参平、百婆仙らに関する施設と歴史的背景が詳しく記されている。ここでも歴史的関わりの深い韓国への配慮が感じられるが、一方で、この韓国語版にのみある内容は韓国人以外には必要ないのか、逆に四季折々の行事は韓国語版になくていいのか、という疑問を感じる点は指摘しておきたい。

②『マップ』はJ・E・K・Cs・Tの5種が発行されている。冊子『有田』は現地での配布より旅行社・顧客などへのプロモーションのための事前配布を想定しているといい、現地では主にこの『マップ』が活用されている。イラストマップに地名、施設名がピクトグラムや写真、イラストと共に配置されていて地図そのものはわかりやすい。ただ、空いた空間に添えられた短いコメントの中には、短い直訳的表現であるがために内容が十分に伝わっていないものが目につく¹¹。国内客向けの文言をそのまま外国語に訳すのではなく、必要に応じて背景説明を加えるか、スペース的に難しければ思い切って省略または削除を検討すべきであろう。

③『文化館』はJ・E・K・Cs・Ct・Dの6種が準備されているが、館内見取り図を中心に、展示室の概要と代表的な11作品の名称が書かれているのみで、情報は少ないと言わざるを得ない。同館は有田焼のみならず九州の古今の陶磁器を網羅的に展示した芸術と歴史文化の学びの場であるにもかかわらず、展示物の解説は一部を除きすべて日本語のみある。国内外の人々に焼物文化と芸術性を伝える施設であるだけに、多言語による詳細な情報が提供されることが望ましいと言えよう¹²。

4.3. ウェブサイト

次に有田の観光関連の公式サイトとして、①有田観光協会が運営する観光公式サイト「ありたさんぽ」、②佐賀県立陶磁文化館の公式サイト、③一般社団法人佐賀県観光連盟が運営している「あそぼーさが」、④佐賀県文化・スポーツ交流局文化課で運営する「肥前やきもの圏」を検討する。ウェブサイトへの接続は2021年8月から2022年1月の間に行った。

言語名は4.1.、4.2.と同様に略記するが、加えて、フランス語をF、ロシア語をR、スペイン語をSと略記して付記する。

¹¹ 例えば「故岡本太郎氏の遺作となったモニュメント『花焔』というコメントが直訳されており、意味が伝わっていないと思われる。

¹² 九州陶磁文化館が2020年から観光庁「地域観光資源の多言語解説整備支援事業」により進めてきた英語解説文見直しの成果は、2021年に一部公開され、2022年4月のリニューアルオープン時に全面公開される見込みである（観光庁ホームページ掲載同事業資料および九州陶磁文化館聞取りより）。

①「ありたさんぽ」はPC版，スマホ版ともJ・E・K・Cs・Ctの4言語（5字体）対応である。有田観光協会によれば，日本語以外の言語は日本語からの機械翻訳を利用しているが，有田焼の紹介や観光施設に関する基本情報などの固定部分のうち翻訳上の問題の目立つ箇所を手で修正しているという。ただ，全面的に修正する余力も専門性もないため，ある程度韓国語のわかるスタッフが，できる範囲で少しずつ作業しているのが現状とのことだ。このサイトは，現在進めているこの作業を徹底するだけでも十分な機能を果たすと思われるため，各言語とも人材を補充するなり外注するなりして，訳文の質向上を目指してほしいものである。

②佐賀県立陶磁文化館の公式サイトはPC版，スマホ版ともJ・E・K・Cs・Ct・Dの5言語（6字体）の対応となっているが，日本語以外の言語のサイトは，ごく簡単な施設概要のみとなっている。4.2. で述べたリーフレットよりさらに情報量は少なく，今後の多言語対応事業の展開に期待したい。

③「あそぼーさが」はJ・E・K・Cs・Ct・Tの5言語（6字体）対応だが，選択した言語ごとに独立したサイトとなっている。佐賀県観光連盟によれば，どの言語も日本語からの対訳ではなく，各言語圏のニーズに沿ったサイトを一から製作し，マーケティングに繋げているという。情報の量や扱い方も一定ではないが，当然のことながら文章に違和感がなく情報もわかりやすい。ただ，有田町は佐賀県の一部として紹介されているに留まるため，有田町の観光ツールとして十分に機能するとは言えないだろう。

④「肥前やきもの圏」は，江戸時代の肥前佐賀藩の領域に点在し，現在は县市町が異なるために統一的な観光施策を行いにくくなっている肥前焼関連の観光情報を，县市町域を超えてアピールするユニークなサイトである。トップページに選択言語がJ・E・Cs・Ct・Kと表示されているが，いったん外国語を選択するとGoogle翻訳の機能に接続され，Googleで翻訳可能なあらゆる言語を選択することができる。

しかしながら，全国的に有名ではない観光地の名称や特徴を機械翻訳で対応することにはかなり無理があると言わざるを得ない。同じ機械翻訳でも，文章で綴られている場合は，多少の違和感があっても意味を推察することがある程度可能であるが，観光地の紹介文には不完全な文や新語・造語，キャッチコピーのようなフレーズが多用されるため，理解不能な翻訳文が生成されてしまいがちだ。全面的に機械翻訳を活用するのであれば，翻訳に不向きな表現は避け，日本の人名・地名の読み方が正確に翻訳されるようなしくみを組み込み，日本の歴史・文化の知識のない相手にわかるような紹介文を書き下ろすなど，元となる日本語文を工夫する必要があるだろう。

4.4. 考察

以上のような韓国語対応環境で，日本語や英語を解しない韓国人が個人旅行で有田を訪れた

際、有田についてどのような感じ、どのように理解されるだろうか。

4.2. に述べた冊子『有田』は内容的に充実しているが、A4版とやや大きいため、旅行者が持って歩くのには適しておらず、現場で知りたい情報がすぐには得られにくい。現場で実際に活用されるのは『マップ』であるが、『マップ』には施設情報は書かれていないため、やはり現場に設置された案内解説板の役割が大きい。

そうすると、4.1. で述べたように、朝鮮人陶工関連の施設だけに焦点が当たり、それ以外の施設については、それがどういうものなのかよくわからないまま通り過ぎることになる。かといって、案内解説板の設置には多くの予算と手間がかかり、一度作ったものを修正することがなかなかできないという点で、これを増設することは現実的ではないだろう。今後は、現在、各地で事業が進んでいるように、現地の既存の設置物にQRコードを貼り付け、スマートフォンで読み込むと解説のウェブページに飛ぶというようなシステムを利用するのが効率的であろう。

4.3. で見たウェブサイトについては、いずれもまだ発展途上にあると言える。しかし、「ありたさんぽ」が少しずつ改善を進めているように、ウェブサイト上で修正できるのがインターネットの強みである。今後、上記のQRコード導入とともに、リンク先のサイト上での文言修正や欠落部分の追加、さらには機械翻訳の弱点克服などを行っていくことによって多言語対応を充実させることが可能だと考える。

5. 有田焼に関連する文化用語等の韓国語訳をめぐる課題

以上で有田町の観光関連施設の多言語対応状況を概観した。本章では、もう一步踏み込み、韓国語への翻訳に関わる問題を考察する。

一般に日本の地名・人名・施設名などの固有名詞や日本独特の文化関連・生活関連の用語を韓国語で表記する場合、韓国の国立国語院が定めた「語文規定」の中の「外来語表記法」および観光庁（2014, pp.19-20）に示された語種・語構成別の訳例等を参考にすることになる。

しかし、実際にはこれらを基準にしたとしても、訳語候補がいくつかある場合があり、どれを採用するか判断が難しいことが多い。例えば、観光庁（2014, p.20）には「茶碗」のように「ちゃわん」という日本語の読み方を伝える必要がある場合は「차완 [tʃawan]」とするが、その意味である「그릇 (器)」を（ ）に添えるとある。一方、「暖簾」は対訳語がないので説明的に「가게 입구에 거는 천 (店の入り口にかける布)」とする。「寿司:스시 [suʃi]」も対訳語はない¹³が、発音どおりに表記しても既に広く認識されるため発音どおり表記するとある。しかし、これは「茶碗」の読みは伝えるべきで、「暖簾」の読みは伝えなくてもよいと判断し

¹³ 寿司の対訳語として「초밥 (酢飯)」があり、対訳語がないというのは誤りである。

た場合の話で、「暖簾」は日本独特の文化だから発音どおり「노런 [noren]」として説明的意味をカッコに入れるべきだと判断することもありうるし、逆に、「茶碗」は韓国語で「다완<茶碗> (茶を飲む際に用いる器)」と言うので、わざわざ日本語の発音と意味を伝える必要はないという判断もありうる。つまり、対応する訳語に訳するか、日本語の発音どおりに音訳するか、カッコの中に説明を添えるか、説明調のフレーズを訳語とするか、という選択に絶対的な基準や正解はないと言え、結局、翻訳者は依頼者の意向を汲みながら常に決断を迫られるのである。

4で概観した有田町の観光資源・施設に関する韓国語解説文に現れた訳語にもそのような選択の結果だと思われるものが数多く含まれているが、本稿では特に文化的、歴史的背景を考慮すべき問題、有田焼をめぐる、有田ならではの課題について考察する。従って、ここでは機械翻訳による誤訳、植田（2017）、李（2018）が指摘したような表記法上の不統一、単純なミスなどの問題には触れないものとする。

なお、以下で韓国語の表現を示す際は、「」内にまずハングルを示し、それが漢字に由来する語であれば漢字表記を<>内に、漢字に由来しない語は対訳語または説明的意味を（）内に、ハングル表記が日本語の発音を写しただけの場合はハングルの表している発音を〔〕内に入れて添える。語種が混合している場合はこれらを原語の順番に配置する。出現場所は、解説案内板であればAと4.1.で示した①～⑩で表し、印刷物はBと4.2.の①～③で、ウェブサイトはCと4.3.の①～④の組み合わせで{ }内に示す。

5.1. 「有田焼」を何と訳すか

「有田焼」の訳語としては、a. 「아리타야키 [aritayaki]」{B①, C①}, a. 「아리타산 도자기 [arita] <産 陶磁器>」{B①, C①}, c. 「아리타 도자기 [arita] <陶磁器>」{A⑤, A⑥, A⑨, B①, B②, C①, C②, C③}があった¹⁴。aは発音どおりの表記、bはある意味説明的、cは「～焼」つまり焼き物を「도자기<陶磁器>」と一般化した訳語と言えよう。

では、有田焼は本当に「陶磁器」なのだろうか。「陶磁器」とは「陶器」と「磁器」の総称であるから、「陶磁器」とすれば両方含まれるので無難だと思いがちだ。しかし、実質的には「有田焼」といえば磁器である（有田観光協会聞き取りより）。

3で見た有田焼の歴史からもわかるように、文禄・慶長の役の前、すでに日本国内では陶器の茶器が生産されていた。役の後、日本に連れて来られた李参平らによって初めて磁器が生産されたのである。この磁器が「伊万里」や鍋島藩窯の「鍋島」として名を馳せ、現在の有田焼に繋がっている。従って、有田焼は本来「아리타 자기 [arita] <瓷器>」とすべきであろう。

¹⁴ 「아리타도자기 [arita] <陶磁器>」{A⑥, B①, C①}のように「아리타」と「도자기」を付けて表記したものもあった。韓国語の表記法では分かち書きにも厳密なルールがあるため、本来は別にカウントすべきだが、本稿では分かち書きしているかどうかを議論の対象としない。なお、機械翻訳用のサイトには「구이 (調理法としての「焼き」)」のような誤訳が随所に見られた。

ところが、「日本磁器発祥の地」「日本で最初の磁器」という中の「磁器」が、「도자기<陶磁器>」{A⑥, B①, C③}と訳されている箇所がある¹⁵。陶器は文禄・慶長の役以前から生産されていたのだから、これは明らかな誤りである。なぜこのような誤訳が見られるのだろうか。どうやら日本語、韓国語それぞれに用語の慣用的使用に混乱があることによるものだと考えられる。

韓国語にも「도기<陶器>」「자기<瓷器>」という語は存在するが、いずれもハングルだけで書いた場合、同音異義語が多く、一般には「도자기<陶磁器>」とまとめて呼ぶ。あるいは、磁器に焦点を当てて語る場合には「청자<青瓷>」「백자<白瓷>」のようにさらに細分化して述べることが多い。このため、「자기<瓷器>」という訳語に不慣れな翻訳者が「도자기<陶磁器>」という語を選択してしまったのではないだろうか。

一方、日本語の方でも「陶器」と「磁器」を区別する習慣はあるものの、やはり「陶磁器」のほうが一般に通りがいい。また、磁器の原料は「磁石」または「陶石」と呼ばれ、焼き物職人は「陶工」と呼ばれる。「有田陶器市」という名の有名な催しさもある。つまり「陶磁器>磁器」というだけでなく「陶>磁」という実態があるため、「陶石」「陶工」「陶器市」は誤りではない。従って「有田焼」を「아리타 도자기 [arita] <陶磁器>」と訳すのも誤りとまでは言えないのである。

しかし、「일본 최초의 도자기 생산: 日本初の陶磁器生産」という表現が誤りなのは確かである。今後はこの種の問題が発生しうることを念頭に、日本語原文の表現を明確化するとともに、韓国語訳文を注意深くチェックする必要があると思われる。

なお、韓国・誠信女子大学教授の朴泰成氏によれば、近年、韓国では生涯教育の中で自国の伝統文化を本格的に学ぼうとする社会的雰囲気が高まっており、かつては漠然と「도자기<陶磁器>」と呼んでいたもののうち、ある種のもは「자기<瓷器>」と呼ぶべきであることが浸透してきているという。言葉の使い方は社会と共に変化するものがある。これまで「有田焼」は「아리타 도자기 [arita] <陶磁器>」と訳されてきたが、今後は「아리타 자기 [arita] <瓷器>」という表現を定着させていくべきではないだろうか。

5.2. 焼き物関係の専門用語

かつて泉山で採掘された磁器の材料は「磁石」とも「陶石」とも呼ばれる。収集資料では「磁石」を「자석<磁石>」{A③, A⑥, A⑨}, 「陶石」を「도석<陶石>」{B①, C①}のように直訳しているものもあるが、「磁石」を「도석<陶石>」{A⑩, C①}, 「백자광<白瓷鑛>」{A⑥}, 「磁石場」を「채석장<採石場>」{B①, B②}と訳しているものもある。

¹⁵ 同様の文脈で「磁器」を「자기<瓷器>」と訳している案内板もある {A③, A⑧, A⑨, A⑰}。

これは、韓国語では「磁石」がマグネットの意味となってしまうことを避けようとしたものと思われる。日本語では磁器の原料は「磁石」と書いて「じせき」と読み、この読み方を一度聞けば「じしゃく」と混同することはあまりないが、韓国語では「자석<磁石>」は「じしゃく」と解かれてしまう。解決策として、磁器の材料としての磁石は「도석<陶石>」、磁石を採掘する場所である「磁石場」は「채석장<採石場>」とするのが妥当ではないだろうか。



図6 川の水を利用した「唐臼」

次に、「唐臼（からうす）」である。「唐臼」は「唐」つまり中国大陸から陶工が持ち込んだ（技術を導入した）「臼」ということで、川の水の力を利用して陶石を砕く道具である（図6）。陶器の材料である「陶土」は柔らかい粘土だが、磁器の原料は「陶石」、つまり石なので、採掘したあと粉々に碎かなければならない。この作業は人力ではとうてい無理であるため、水の重みを利用するのである。

これを韓国語では「물레방아（水車、水力を利用した臼）」というが、今回収集した資料には「가라우스 [karausu]」{C①}、「당구<唐臼>」{C①}、「디딜방아（足踏み臼）」{B①, B②}という訳語しか見られなかった。

「가라우스 [karausu]」のように発音のままハングル表記するのは文化材の名称を表す際の一つの方法ではあるが、その場合はそれがどういうものかという説明を添える必要がある。また、「당구<唐臼>」という韓国語はなく、漢字を示したとしても「唐」に含まれる意味は日本独特のものであるため、意味は伝達されない。小学館『朝鮮語辞典』では「디딜방아（足踏み臼）」に「唐臼」、「물레방아（水力を利用した臼）」に「水車」との訳が付けられており、ここで述べる「唐臼」の訳語を導き出すことはできない。しかし、「唐臼」が何をどのようにする道具なのか、その実態を把握すれば、そこから適切な訳語にたどり着くはずである。

また、磁器を高温で焼くため山の斜面に焼成室を階段状に作った「登り窯」も朝鮮から伝わったものとして広く知られている。韓国ではこれを「오름가마（登り窯）」または「등요<登窯>」と呼ぶ。今回の調査によればA⑨には「오름가마（登り窯）」が使われているが、B①には「계단식 가마<階段式>（窯）」とある。確かに「계단식 가마<階段式>（窯）」は登り窯の形状をある意味正しく伝えてはいるが、本家の韓国で今も使われている「오름가마（登り窯）」「등요<登窯>」という用語を使うべきであろうし、そうすれば説明なしに理解可能となる。

これらのいわゆる専門用語の翻訳には、単に日韓両言語に精通しているというだけでなく、専門的な知識があるか、専門家水準でなくても特定の分野についてていねいに確認する意思と能力が必要である。専門家にコンタクトできることが望ましいが、翻訳者にその意思や判断力があれば、適切な訳語にたどり着くのは難しいことではないと思われる。

5.3. 地域の歴史や日本固有の文化と関わる用語

有田焼の始祖は李参平であるが、彼は後に鍋島家から「金ケ江」の姓を与えられ「金ケ江三兵衛」と呼ばれた。その後、日本の商家や伝統職の習慣に倣い、「金ケ江三兵衛」という名が襲名され、二代目金ケ江三兵衛、三代目金ケ江三兵衛と引き継がれる。しかし、朝鮮の習慣で先祖の姓名を継いで二代目、三代目とする習慣はない。つまり李参平は当人固有の名前であって二代目李参平はありえない。ところが「初代金ケ江三兵衛」を「초대 이삼평<初代 李三平>¹⁶」と訳している箇所がある{B①, C④}。「초대 가네가에 산베에<初代> [kanegae sanbee]」とするのが適切なのであるが、翻訳者はこのような文化的背景の違いを考慮せず、単純に「金ケ江三兵衛」を「이삼평」と置き換えたものと思われる。

これと関連し、前出の朴泰成教授によれば、韓国では「窯元」という概念がなく、従って韓国語に適切な対訳語がないという。朝鮮における陶工は国が運営する官窯に属する奴婢であったが、日本ではその技術を「家」の中で受け継いできた。それが「窯元」という一種の家柄のような概念となるが、同時に「窯元」は磁器製造所としての機能を持つ。そのため「窯元」の訳語として「도자기 굽는 곳 (陶磁器焼き場)」{B①, C①}, 「도자기 제작업체<陶磁器 製作業體>」{B①}, 「가마 (窯)」{B②, C④}, 「공방<工房>」{C④}といった様々な訳語が乱立してしまう。文脈によっても異なりうるものの、筆者個人は「요장<窯場>」あたりが訳語として有力なのではないかと思うが、このように日本特有の文化を背景とする用語については日韓の事情をよく知る専門家の間で議論し、広く共有していく必要がある。

5.4. 外国語による情報発信のあり方

今回の調査では、韓国語解説文はおおむね日本語解説文からの翻訳であり、多少の補足説明や言い換えはあっても内容が大きく異なるというケースはほとんどなかったが、1件、日本語の解説内容と韓国語の解説内容にかなりの違いのあるものがあつた。

表2は「百婆仙の法塔」の案内板説明文の一部である。下線部は韓国語解説文で省略された

¹⁶「李参平」をハングルで書けば、「이삼평」となるはずだが、有田では「李参平:이삼평」としている。なぜ漢字とハングル表記が食い違うのか、その経緯は不明だが、想像するに、鍋島軍に捕らえられ、名前を聞かれた際、「삼평」と名乗ったものが「三平」と認識され、のちに日本語で同じ発音の「参平」の字を当て直したのではないか。日本名が「三兵衛」であることから、もとは「삼평<三平>」であったものと思われる。なお、『有田町史 陶業編 I』(pp.12-15)によれば、李参平または李三平が本名であったかどうかは文献上も定かではなく、日本でそう認識されていたということである。従って、李参平をハングルで表記する際、日本語読みの音訳である「리산페이 [risanpei]」とするのが適切だという考え方もありうる。

表2 「百婆仙の法塔」の案内板解説文(一部)

<p>日本語解説文</p> <p>夫の深海宗伝と共に豊臣秀吉の朝鮮出兵(1592~1598)に従軍した<u>武将の領主</u>、後藤家信が帰国した際、日本へ連れられてきました。</p>
<p>韓国語解説文</p> <p>토요토미 히데요시가 일으킨 임진왜란 정유재란 때, ①일본군은 많은 문물을 약탈했을 뿐만 아니라, 많은 조선인을 일본에 연행했습니다. 그 중에 ②경상도 김해 출신 김태도(일본명 후카우미 소텐)도 있었고 …〈後略〉</p>
<p>日本語訳：豊臣秀吉が起こした壬辰倭乱・丁酉再乱の際、①日本軍は多くの文物を略奪しただけでなく、多くの朝鮮人を日本に連行しました。その中に②慶尚道金海出身のキム・テド(日本名：深海宗伝)もおおり…〈後略〉</p>

部分、波下線部は韓国語解説文で付け加えられた部分である。

「百婆仙の法塔」の韓国語解説文は、全体的に韓国人観光客にとって余剰と思われる情報は省かれ、理解のための補足情報が加えられ、情報の順番も入れ替えられている。この点は文化庁(2019)に示された「外国人目線に立った訳文づくり」として望ましいものと言えよう。韓国語文で削除されている下線部は確かに韓国人観光客には細かすぎる情報だと言えるし、波線部②は補足説明として有用だと言えよう。しかし、波下線部①は本当に必要だろうか。

案内板は町が設置したものであるが、商工観光課に確認したところ、この点を把握してはいなかった。波下線部①は確かに歴史的事実だろうが、解説文に書くかどうか、また書くとすればどのように書くかについて、設置者は確認する必要がある。全体として日本語文は事実を淡々と述べている一方で、韓国語文は韓国人の立場が前面に現れた書きぶりとなっている。有田町の観光施設の解説文は有田町の立場で書かれるべきであって、韓国人の立場を代弁する書きぶりとなるのは好ましくないのではないだろうか。

また、解説文末尾には「深海宗伝」という、百婆仙の夫の名前について、「후카우미는 깊이 고향을 그리는 뜻의 창씨：深海は深く故郷である金海を懐かしむという意味の創氏」という注記が加えられている。注記が必要であることは理解できるが、これを「창씨<創氏>」と表現するのはいかがなものか。これでは1939年に日本統治下の朝鮮で実施された「創氏改名」と同様のことが行われたというイメージを与えかねない。「深海」は賜姓、すなわち手柄を認め身分上昇の証として姓を与えたものであり、仮に注釈を加えるならそのような内容とすべきであろう。

観光庁(2014, p.23)は、外国人向けに補足すべき解説文章や補足の考え方として「展示物等に外国の文化や歴史との接点があり、それに言及することが、訪日外国人旅行者が我が国の

歴史・文化を正しく理解し、共感・理解を持つことに資する場合には、その文化・歴史についての説明を積極的に盛り込む」と述べているが、その扱いを外国人の翻訳者に丸投げするべきではないだろう。また、文化庁（2019）は「外国人の視点」を強調し、「ネイティブの外国人ライター」の起用を勧めているが、これも外国人の価値観で日本の文化を解釈し、発信者である日本側の意図とは異なった内容を発信してもよいということではあるまい。あくまでも発信主体が何をどう発信するのかについて明確な意図なり方針なりを持ち、翻訳者あるいは外国人ライターと協力して解説文を作っていくことが本来の姿であろう。

以上5.1.～5.4.で述べてきた様々な課題を克服するには、まず外国語翻訳文または外国語で書かれた解説文は、その言語を専門家レベルで理解し、かつ依頼者側の意図を十分に理解する日本人もしくはそれに準ずる人がていねいにチェックすることが重要であろう。

また、専門用語の訳語については、専門家に諮問できる環境を整えることが最も望ましいが、専門家というほどでなくても、有田の場合なら、有田焼や地元の文化の実態を理解し、かつある程度韓国語のわかる人がチェックできれば結果はかなり違ったものになると思われる。

文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議（2016）は「訪日外国人旅行者に文化財の魅力伝えるための視点」として優秀な人材の確保を求めているが、若干ハードルが高く、特に地方においてはなかなかその要件が揃わないことも多いだろう。今回検討した一般向けレベルの用語の翻訳であれば、一流のプロでなくても、少し想像力を働かせることができ、様々な立場の人が重層的にかかわることで、改善できる可能性は高くなるものと考えられる。

6. まとめ

本稿は、韓国との歴史的・文化的つながりの深い「やきものの里」として知られる有田町の観光関連施設の韓国語対応状況について、現地を訪れた韓国人観光客が接する韓国語解説媒体の設置・発行状況を確認し、韓国語解説文の内容分析を通じて、以下の結論を得た。

有田町の観光施設の多言語対応は、1990年代、日本語と英語を併記した解説案内板から始まり、続く2000年代には東アジアからの訪日客の増加に対応して、日・英2言語から韓・中2言語をプラスした4言語の解説案内板が増設される形で拡充してきた。しかしその結果、韓国語に注目する限り、その施策は李参平、百婆仙といった朝鮮人陶工および彼らの事績に関連する史跡に偏ることとなった。結果的に、有田を訪れた韓国人観光客は、少なくとも言語的な面で、既知の知識を再確認するに留まることとなり、新たな発見や思いがけない体験を得るには至りにくい状況になっていることが明らかになった。

訪日観光の意義は経済的側面が注目されがちだが、日本文化を知り、日本を正しく理解してくれる外国人を増やすことも重要な目的であるはずである。このことを踏まえれば、韓国人観

光客を迎えるにあたり、彼らの求めるものだけに応えるのではなく、有田の多様な姿、日本のありのままの文化に対する重層的な理解を導くためにも、すべての観光施設について韓国語を含む多言語対応を行うのが望ましい。その方策として、案内解説板を設置できればそれに越したことはないが、現実問題として負担が大きいため、QRコード対応のように、現状を大きく変えず、リンクする内容を修正・改善できる、アップグレード可能な体制を作ることが望ましいであろう。

また、多言語解説文をとりあえず作って翻訳品質の向上を進めていかなければ、やはり有田と有田焼に対するよりよき理解には導けまい。現状では、専門用語の適切な翻訳、文化的背景を踏まえた解説とはなっていない場合や、中には事実と反する内容となってしまう場合も見られた。有田町の場合、基本的に日本語原文から外国語への翻訳の形で多言語解説が作成されているが、日本語原文の曖昧さや混乱を排除すると共に、情報を精査し、翻訳過程で専門家による諮問や地域事情・日本文化に明るく韓国語にも精通した人によるチェック体制が必要だと思われた。

さらに、観光庁（2014）、文化庁（2019）では「外国人の視点」を考慮した解説文作成や「外国人ライター起用」を勧めているが、相手国との間で価値判断の分かれる事項の解説文を相手国の人に依頼する場合は、内容を任せきりにせず、必ず依頼者側の立場から解説文が適切に記述されているかをチェックする必要がある。

2022年2月現在もCOVID-19感染拡大防止のため訪日外国人観光客はほぼゼロであるが、事態が収束し、国際観光が再開された暁には、再び多くの韓国人観光客が訪れることは当然予想される。その韓国人観光客が、彼らの歴史・文化と関連のある観光資源を訪れた際、わかりやすく興味深い解説であるとともに、誤りや偏りなく日本を伝え、日本の歴史・文化・社会の正しく重層的な理解につながる対応が準備されていることが望まれるといえよう。

現在、観光地の多言語表示の改善事業が観光庁や文化庁によって進められ、英語の解説文を改善するためのメソッドやツールが提示されているが、英語でさえ各地域において望ましい人材を育てるのは容易なことではない。今後は、英語以外の外国語を含め、地域の需要に対応できる専門性のある人材をじっくり育て、地域間の連携を構築できるような環境作りを支援することが重要なのではないだろうか。

謝辞

本研究の遂行において、筆者の疑問にお答えくださった韓国・誠信女子大学の朴泰成教授、一般社団法人有田観光協会の山口瞳専務理事、有田町商工観光課の鷺尾佳英課長ほかの皆様へ心から御礼申し上げます。なお、本研究はJSPS 科研費20K12446の助成を受けたものです。

参考文献・資料

- 有田町史編纂委員会（1985）『有田町史 陶業編Ⅰ』，有田町。
- 有田町史編纂委員会（1986）『有田町史 通史編』，有田町。
- 有田町史編纂委員会（1987）『有田町史 陶芸編』，有田町。
- 植田晃次（2017）「多言語表示と言語規範：『観光立国実現に向けた多言語対応の改善・強化のためのガイドライン』を例に」『言語文化共同研究プロジェクト』2016，3-14。
- 加藤大鶴，澤温嬉（2009）「山形県村山地方における外国人旅行者を対象とした多言語サービス」『日本語学』28（6），明治書院，122-134。
- 加藤重広（2009）「北海道における外国人観光客と多言語化—ニセコリゾートを中心に—」『日本語学』28（6），明治書院，110-121。
- 環境省（2015）『多言語表記対訳語集』。
- 観光庁（2014）『観光立国実現に向けた多言語対応の改善・強化のためのガイドライン』。
- 観光庁（2020）『魅力的な多言語解説作成指針』。
- 扨素妍（2020）「平城京・平城宮の遺跡名や地名の韓国語表記方法に関する提案」『奈良文化財研究所研究報告』28，42-45。
- ダニエル・ロング（2011）「世界の少数言語の言語景観に見られるアイデンティティの主張」内山純蔵監修，中井誠一，ダニエル・ロング編『世界の言語景観 日本の言語景観 景色のなかのことば』桂書房，3-12。
- 長谷川由起子（2021）「対馬における観光施設の案内板の韓国語解説文の現状と課題」『言語政策』17，123-139。
- 濱口順子（2021）「京都市における言語景観及びサインの施策と特徴」『観光学論集』16，21-30。
- 文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議（2016）『文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議訪日外国人旅行者に文化財の魅力を伝える視点』。
- 文化庁地域文化創生本部（2019）『文化財の多言語化ハンドブック』。
- 本田弘之，岩田一成，倉林秀男（2017）『街の公共サインを点検する—外国人にはどう見えるか』大修館書店。
- 松田美香（2009）「ONSENまちの言語事情」『日本語学』28（6），明治書院，98-109。
- 山田幸三（2018）「産地の自己革新と企業家活動—有田焼陶磁器産地の事例を中心として」『企業家研究』15，81-107。
- 李炫姫（2018）「沖縄における韓国人観光客への言語対応の現状（その二）—他地域との比較から—」『外国語研究』22，沖縄国際大学，1-15。
- 우리역사넷（韓国歴史ネット）>역대 국사 교과서（歴代国史教科書），국사편찬위원회 데이터 베이스（国史編纂委員会データベース）（2022年2月15日閲覧）。